國學院大學学術情報リポジトリ

# 生還将兵の戦地体験と慰霊：小田敦巳『一兵士の戦争体験-ビルマ戦線生死の境-』の事例から



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-10 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 中山, 郁 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00002271 |

# 生還将兵の戦地体験と慰霊

## ――小田敦巳『一兵士の戦争体験 ―ビルマ戦線　生死の境―』の事例から――

中山　郁

### はじめに

詩人で小説家の伊藤桂一氏は、かって自身が兵隊であったときに経験した、中国山西省での戦旅を題材として、いくつかの詩を発表している。その中でも最も代表的な作品として挙げられるのが、「連翹の帯」であろう。この詩は駐屯地を出発し、連翹の花の帯を越えて黄土の山中を辿る戦旅に従った兵の語りを通じて、山々の自然と、そこで行われる人の闘いを、瑞々しく透明感を帯びた筆致で描いたうえで、左記のように結ばれている。

いま思いますに、連翹の花の帯は、つまりこの世とあの世の境を劃していたのです
ここから先は黄泉路です――と立て札が立っていたのですが　それがみえなかったのです
いまでも　連翹の花をみますと
ふっと　めまいに似た　ふしぎな懐旧の情を覚えます

結局　あの山の中からは
だれも帰っては来なかったのですよ
むろん　こう申しあげている私自身でさえもが――です[1]

この詩からは、作者が二通りの立場から詩作を行っていることがわかる。すなわち、まず伊藤氏は、「連翹の花の帯」の向こう側、つまりは「黄泉路」から還ってきた兵隊として、この世の人々に、「あの世」たる戦場の世界を語り伝えているのである。そして同時に、この世に戻ることのできなかった戦死者そのものとなり、「連翹の花の帯」の向こうの物語を詩っているのである。それではなぜ、作者は時空を超えて、「あの世」での戦旅を「この世」に伝えることが出来るのだろうか、そして、あの世に残った兵自身となり、詩うことができるのであろうか。さらに、この詩の作者のように、「あの世」を語り、戦死者の声を語ることができる戦友（生還兵）とは、いかなる存在なのであろうか。以上について考えるのが本稿の目的である。

## 一　問題の所在

戦後日本において営まれてきた戦没者[2]に対する慰霊・追悼・顕彰の活動を担い続けてきた人々として、戦没者の遺族とともに、戦友や、彼らによって組織された戦友会の存在を挙げることができる。「戦友」の語は、狭義には陸軍の内務班における教育で用いられた、初年兵（新兵）と古年兵の関係を指すが、一般的には、中隊や聯隊など同部隊に所属したり、さらには同じ戦場で戦った自軍の将兵を指して用いられている。いわば「戦友」とは、軍・部隊という戦士の共同体と、そこにおける戦う者同士の実存的な人間関係を表した言葉といえよう。

戦地から生還した戦友にとって戦没者とは、運命共同体である同部隊でともに生活し、苦難を分かち合った仲間であることから、その慰霊と顕彰は戦友会の最も大事な務めのひとつとされてきた。それゆえ多くの戦友、そして戦友会は、戦没戦友の祀られた靖国神社や各地の護国神社、さらにはゆかりのある寺院や慰霊碑等において慰霊祭を営み、あるいは海外での遺骨収集や慰霊碑の建碑、慰霊巡拝などを行ってきた。そうした戦友会組織の慰霊・追悼・顕彰活動に関する先駆的かつ優れた研究として、昭和五十八年に刊行された、高橋三郎編『共同研究戦友会』を挙げることが出来るが[3]、以後はそれほど研究が進展してきたとはいえない状況にあった。しかし、最近における近現代日本の戦没者慰霊に関する研究の著しい進展の結果、改めて慰霊活動の担い手としての戦友の存在が注目されつつある。

たとえば西村明氏は、戦没者の遺族による遺骨収集や戦地訪問のプロセスを分析し、遺族たちは、旧戦地を訪問することを通じて、彼らと戦没者（「戦死者」）を隔てる「時間的幅・隔たり」と「空間的隔たり」を解消し、共苦・共感的な関係を築いていくが、その過程において戦友たちが「戦地と銃後、戦中と戦後、戦死者と遺族の隔たりをつなぐ媒介者」の役割を担うなど、「先達」的役割を有することを指摘している[4]。また、平成二十年に筑波大学で開催された日本宗教学会第六十七回学術大会のパネル「現代日本の戦死者慰霊―慰霊の現場から視えるもの―」においても、参加した研究者たちによって、慰霊巡拝や遺骨収集を宗教学の理論的枠組みの中で議論する手掛かりの一つとして、戦地慰霊における戦友の「先達的役割」が議論されている[5]。

戦友の果たす「先達」的な性格については、既に橋本満氏が、戦友会主催の慰霊祭の場における役員の役割について「戦死者の魂へ戦友たちを案内する「先達」」として言及しており、必ずしも新しいことではない[6]。しかし、橋本氏が戦友会という、限定された組織の中の問題として言及しているのに対して、現在議論がなされようとしているのは、むしろ戦友と、戦没者遺族や戦後生まれの非戦争体験者などの、戦没者に対する慰霊・追悼・顕彰という営為の担い

手との関係性についてなのである。

ところで「先達」の語は、広くは「その道の先輩。先学」を意味するが[7]、具体的には、修験者など、主に霊山や霊場に信者を案内し、参詣や修行の指導を行う宗教者を指して用いられる[8]。彼らの役割は、単に山路の案内には限られず、寧ろ、それを通じて峯々に秘められている、神仏や精霊などの聖なる存在を人々に示すことにあり、その力能は霊山という異界で修行し、そこの神仏等と合一することによって獲得されると説明されている[9]。それでは、もし戦没者慰霊の場における戦友の役割を「先達」とするのなら、なぜ彼らは先達たり得るのであろうか？そして、その「先達」と遺族や非戦争体験者は、いかなる関係性を結んでいるのであろうか？以上の課題について考察するためには、まず、戦場から生還した戦友と、戦没戦友との関係性について明らかにし、次いで、こうした関係性に基づいて生還戦友から示される戦場体験や戦没者への思いを、遺族や非遺族などが、どのように受け止めているのかについて考えていく必要があろう。

戦没者慰霊の世界における戦友の活動は、戦記の執筆や部隊史の編纂、慰霊碑の建立、遺族への戦没状況の説明、慰霊巡拝や遺骨収集、そして靖国神社国家護持など「英霊の声」に答えようとする運動など多岐にわたる。しかしその中でもとくに戦没戦友への思いが表明され、かつ、多くの遺族や非戦争体験者の眼に触れられる媒体として、部隊史や個人の戦争体験を書き綴った戦記の存在を挙げることが出来る。これらの図書の多くは、単に戦場体験の記録というのみならず、その執筆目的として大なり小なり戦没者の慰霊がその目的として掲げられている。それゆえに、部隊史や戦記は、戦没者と、書き手である戦友との関係をテクストの上に表現した資料としてとらえることが可能なのである。そのうえで読み手となる遺族や非戦争体験者の反応について研究することが出来たならば、戦没者と遺族、非戦争体験者の間における、生還戦友の位相について、一定の見通しを得ることも可能となろう。

以上の作業の手始めとして、本稿では、平成十年に自身の戦争体験記『一兵士の戦争体験　―ビルマ戦線　生死の境―』[10]を刊行した小田敦巳氏の事例を中心に、先ず、彼ら生還将兵[11]の体験の舞台となる軍隊・戦場という空間について考察し、次に、その空間から還った生還戦友と、そこから還ることのできなかった戦没戦友との相関関係について論じてみたい。

## 二　『一兵士の戦争体験　―ビルマ戦線　生死の境―』と著者の執筆目的

本書の著者である小田敦巳氏（八十六歳）は、大正十一年二月に岡山県赤磐郡熊山町に誕生。岡山県立第二岡山中学校、米澤高等専門学校を卒業し東京無線電機（株）に入社。昭和十八年、臨時召集により姫路の第五十四師団輜重兵第五十四聯隊に入隊。同年九月にビルマ（現、ミャンマー）のラングーン（現、ヤンゴン）に上陸。以後、アラカン山脈、タンガップ、シンゴダイン、ペグー山地、シッタン河、シャン高原などを転戦した。終戦後は英軍の抑留下にバヤジー、メークテーラにおいて労働作業に従事後、二十二年七月に復員している。最終階級は陸軍伍長。戦後は二十三年に農林省岡山資材調整事務所に勤務後、岡山県庁に移り、経済部、農林部、企業局、総務部、管材課参事などを歴任したのち昭和五十二年に定年退職。以後、民間企業に勤務を続けながら戦友会の活動や慰霊巡拝に参加しつつ、自身のビルマ戦線体験記をまとめ、平成十年に『一兵士の戦争体験　―ビルマ戦線　生死の境―』を自費出版した。同書は岡山県内を中心に大きな反響を呼

小田　敦巳 氏

び、現在までに十刷、約六千部が刊行されている。また、平成十六年には光人社NF文庫から『ビルマ最前線　白骨街道生死の境』として刊行され、二十年にはミャンマー語版も出されている。さらに氏は平成十六年にNHKラジオ番組「ラジオ深夜便　こころの時代」に出演するなど、いくつかのテレビやラジオに出演し、著作について語っている。[12] そして近年は岡山県内各地で自身の戦争体験について講演するとともに、読者や聴衆から寄せられた感想を二冊の冊子にまとめて刊行している。

次に、『一兵士の戦争体験』の内容について簡単に触れてみたい。本書は昭和十八年二月に召集令状を受けてから、二十二年に復員するまでに至る小田氏の体験が書きつづられている。そこには入営前後における会社や友人たちとの交流や内地での兵営体験、ビルマにおける駐屯生活なども記されているが、筆者が最も力を入れて描いているのは、二十年四月から九月にかけての悲惨な敗走行の経験である。

氏の所属する第二十八軍（策集団）の第五十四師団（兵兵団）輜重兵五十四聯隊第一中隊（金井塚隊）はビルマ到着後、アラカン山脈やベンガル湾沿岸などの各地で輸送業務や拠点警備に任じていた。しかし、昭和二十年春、連合軍の攻勢の前にビルマ戦線は崩壊し、著者の部隊が所属していた策集団は英印軍の攻勢のまえに中部ビルマに孤立。敵中を突破してビルマ方面における日本軍最後の拠点、モールメンを目指して後退を続けた（図1参照）。本書には、悲惨な敗走中に一旦は手榴弾による自決の瀬戸際まで追い詰められたものの、「二重三重の幸運に恵まれ」辛くも生還することを得た著者が見た戦場の有様が記されている。それは戦闘による戦死、飢えと病と雨に苛まれた末の落伍や手榴弾自決、路傍での斃死、シッタタン河の渡河作戦中の溺死など、戦争がもたらすありとあらゆる「戦死」の姿と、路上に類々と転がる死体や白骨を道標に、はだしで歩いていった著者たち生還者の様子など、ビルマ作戦末期の断末魔のドキュメントといえる。

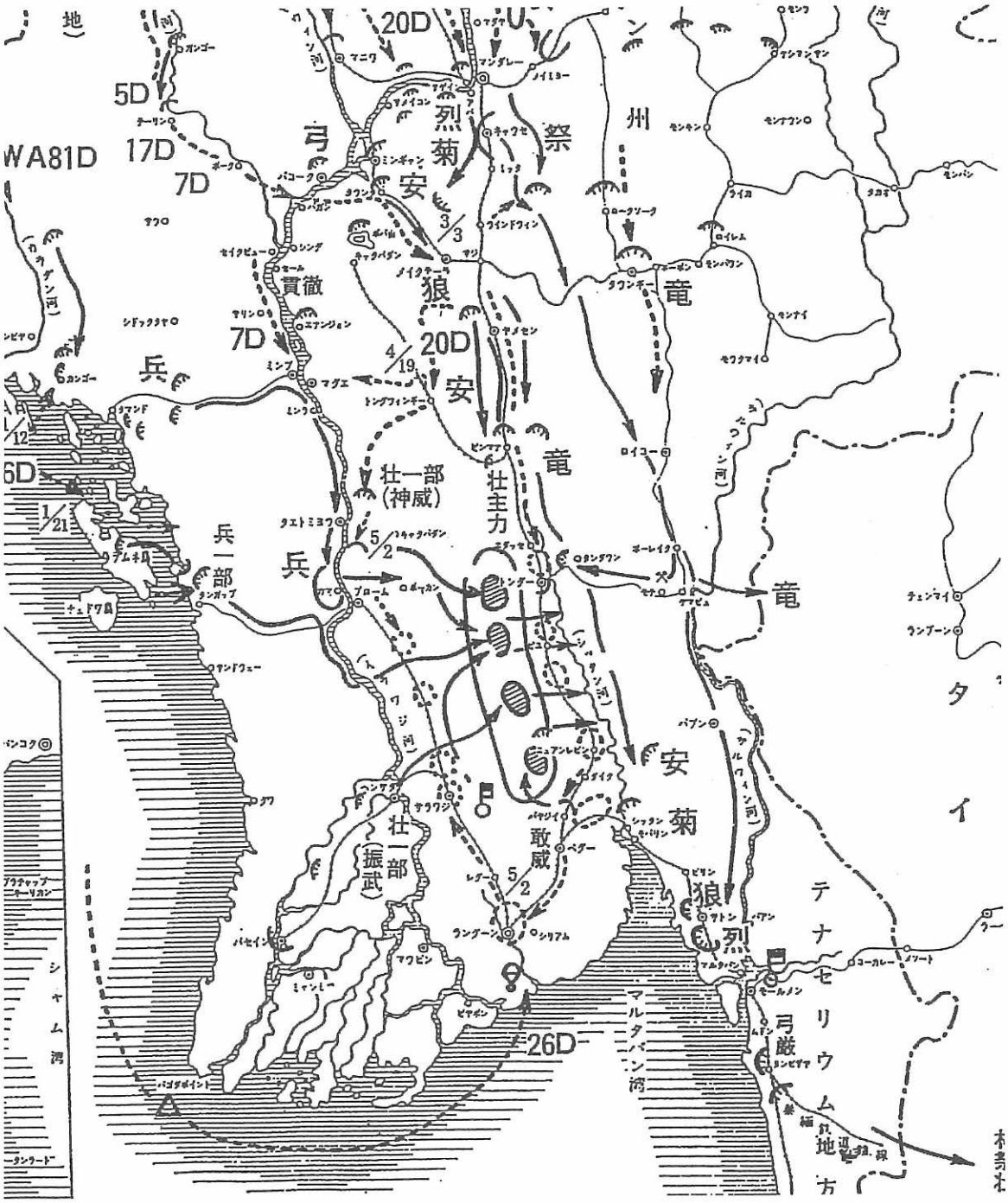


図１　ビルマ方面作戦経過要図
図中に記されている「菊」「弓」などの漢字は日本軍の各師団を表している。なお、「兵」と記されているのが小田氏が所属していた第54師団（兵兵団）である。
（『勇士はここに眠れるか』全ビルマ戦友団体連絡協議会、昭和55年より）

しかし、そうした重い戦場体験を語りながらも、この本には戦記にしばしば見られる過剰な思い入れやメッセージ性は薄い。筆者は素直な筆致で自分の部隊への誇りを表明し、出征を送ってくれる人々に感謝し、恋人からの手紙に励まされ、中隊の上官や戦友の死を悼み、戦争の惨禍に巻き込まれたビルマの人々に思いを巡らしつつ、生還し得たことを亡き戦友や肉親のおかげと感謝している。こうした淡々とした語り口が本書を読みやすくするとともに、その記述に安心感と信頼性を持たせているのである。[13]

次に、小田氏はどのような経過のもとにこの本を記していったのであろうか。氏によれば本書の元となる原稿は、終戦後の昭和二十九年頃にざら紙に書き上げたものであったという。当時小田氏は岡山県による旭川ダム工事のため、寮に寝泊まりしており、「その時分、時間があるわけですわ。そこでひとつ、戦争のことを書いておこうかと思って書き始めました。あのころは未だ記憶も新しいし、寮ですから邪魔者はいないしで、毎晩綴り方をやって千枚書きました」という。[14] しかし、書き上げたときはいつか本にして刊行したいと思ったものの、占領直後の世相も考え、結局原稿を机の中に仕舞い込んでしまったと回想している。このざら紙原稿が再び日の目を見たのは、平成に入り、小田氏が勤めの第一線を下がった頃であった。平成七年、岡山の復員将兵達による戦争体験記の刊行が計画され、氏もそれに加わり小稿を寄せたが、これを契機に再び原稿を取り出し、一冊の本としてまとめようとしたという。その際に改めて戦史や部隊の動向、日付等に関して所属聯隊の戦友会が刊行した『ビルマ戦線回顧録』などのビルマ戦関連の戦記、部隊史を参照したり、所属中隊の指揮班長であった溝口登元准尉や岡山県ビルマ会の兵兵団関係将校などに確認するなど内容を整えていった。そのうえで、妹の友人である中学校の元校長に内容の構成や文体の指導を受けて執筆したという。以上のように、氏の著作は、先ず復員後まもなく記された後、平成に入ってから再度編集のうえ刊行という過程を辿っているのである。[15]

次に、小田氏はこの体験記のもともとの執筆理由について次のように語っている。「私には高等専門学校を出ながら、一兵士、兵隊として同期の中では一番でも、将校となるための幹部候補生の試験を受けることが出来なかった。本当なら外地に行けば（幹部候補生の試験を）受けるチャンスがあると留守部隊の准尉に言われて外地に行ったのに、戦地に行ったら戦争が激しくて試験がありませんとなって、兵隊のままあっちうろうろこっちうろうろして、兵隊のままで将校になれなかったのはやはり残念であった。将校になっていたら書かなかったかもしれない。自分が将校になれなかったのに対して、一兵士の戦争はどんなものであったのだろうかというのを書き残したかった」のであるという。[16] つまり、幹部候補生受験を目指しながら、図らずしも経験した、兵隊としての自らの戦場体験の意味を問うことが、最初の大きな動機のひとつであったといえよう。

小説家の野呂邦暢氏は『失われた兵士たち―戦争文学試論―』において、生還将兵の戦記執筆動機は教訓や理屈によるのではなく、「この人たちは書かずにはいられないから書くのである。自分のしたこと、受けた苦しみ、を書くことで追体験し、再確認する」のであり、「一回限りの個人的人生と昭和史が交錯するとき、そこに現出した場が何であったのかという関心の方が強い」としている。[17] また、昭和二十年代から五十年代にわたる「戦記もの」の傾向について分析した高橋三郎氏は、昭和五十年代以降の「戦記もの」について①筆者が自身の人生をふりかえり、その中での戦争体験の位置づけをしようとしている、②生者・死者を含めた戦友との共通体験や戦後における交流を基盤として書かれる、という傾向を挙げたうえで、「「戦記もの」を書く人々は、死者も生者も、とにかく知れるかぎりの人々を共通体験の枠で位置づけ、そのことによってむしろ新しい絆を作りあげようとしているのであり、」それは「自分は戦中、戦後をどのような絆のなかで生きたのかという自己確認、自己主張」であると論じている。[18]

その意味でいうならば、小田氏の執筆動機も、自分自身の兵隊としての体験を、自身のなかで位置づけ、意味付け

ようとする自己確認という面があったといえるであろう。ただ、それは基本的に、個人が人生の中での戦争や、自らの生が多くの人々との関わりの中で築かれていったことを確認するための、いわば自己完結した世界に留まるものであった筈である。

しかし、このざら紙原稿を基礎として五十年後に刊行された『一兵士の戦争体験』では、刊行目的として「今ならまだ、ビルマ戦線生き残りの一人として、あの無残な戦いの状況、悲痛極まりない有様を正確に書き残すことができる。」し、自身の体で「痛さも苦しさも直接受け、強烈で忘れられない」敵中突破の苦労や「ペグー山系の地獄絵図、シッタン河の溺死の惨状等」、二度とあってはならない戦争の断面を次の世代に伝える「義務と使命」（十七頁）が挙げられている。[19] つまり、小田氏個人の戦争体験は、社会に対して問いかけ、残さねばならないものとして位置づけられることによって、はじめて社会に対して発表されたのである。

それでは、個人の戦争体験と生の道程は、なにゆえに外に向かって開かれなければならないのであろうか、また、自分史的な要素も持つ戦記は、どのような点にこそ伝えなければならない使命と価値があると考えられているのであろうか。いわば、個人の戦争体験やそれを記した戦記が外に向かって開かれる要素――小田氏が語り伝えたかったもの――とは、軍隊と、そこで体験したビルマ戦線末期の地獄、そしてなによりも、死んでいった戦友たちの姿にあったのである。

## 三　異界遍歴体験の語り手としての戦友

戦記がもつ定型的ともいえる執筆スタイルとして、「知られざる戦場」、「知られざる事実」を明らかにする、という

ものがある。なぜそれは「知られざる」ものなのであろうか？それは、著者が還ってきた戦場に読者が赴くことができないことと、さらにその有様も平和な社会に暮らす読者の想像を超えたものであることによる。小田氏の『一兵士の戦争体験』もまた、氏が経験したビルマ戦末期の戦場と、そこで無残に死んでいった戦友たちのありさまを書き伝えることを、主な目的としてる。ところで、野上元氏の指摘するように、戦地への「動員」と戦地からの「復員」の狭間を切りつめたところに戦争体験の位相が存在しているとするならば、[20]その戦争を体験する世界とは、いかなる空間なのであろうか。さらに、そこから還ってきた将兵を、どのように捉える事が出来るのであろうか。

軍隊が社会から隔絶された世界であったことはよく知られている。そこは部隊の外側や人びとを「地方」「地方人」と呼ぶことに示されるように、独自の秩序と生活スタイルのもとに営まれる空間であった。入営兵は画一的な軍服を身にまとい、階級に基づく秩序と独自の用語、生活スタイル、倫理観のもとに教育され、満期除隊後に再び「地方」に戻っていった。戦前の日本社会において徴兵検査が成人式と同様の機能を果たし、また、伍長勤務上等兵や上等兵となった優秀な兵が、満期後に共同体のなかで高い信用を勝ち得ていたことに示されるように、軍隊生活は、通過儀礼的な機能を担っていたが、[21]その機能は軍隊という空間が社会と隔絶され、価値観の相違をもった異界であることによって果たされていたのである。

さらに戦時における兵営から野戦への動員は、日本という生活空間から異国へ、さらに平和な日常から生命の危険を伴う戦地へという、兵営以上に異質で非日常的な世界への移行を意味している。そして大戦後半以降の玉砕戦や、ニューギニア、ビルマ、フィリピンのように惨めな敗走や飢餓との戦いがはじまると、異界としての軍、部隊の組織や秩序すらしばしば崩壊し、禍々しいこの世の地獄が現出する。小田氏もその著作の中で、人間性への信頼を確信させるエピソードとともに、落伍兵や傷病兵のおき去り、衰弱兵の自決、同僚の食料の盗取など、極限の中における人間

のすがたを描いている。こうした敗軍の世界は、戦場という非日常的な異界の秩序すら崩壊した、究極の異界の現出ということができよう。小田氏などのビルマ戦線からの生還将兵―むろん、他戦域も大なり小なり同じであるが―とは、いわば、二重三重に変貌する異界を遍歴した末に、辛くも「この世」に生還してきた存在といえよう。

多くの戦記の書き手が、自身の体験を社会に伝える必要性を感じているのは、先ず、それが銃後に居た人々や、さらには戦争を体験していない人々には推し量ることのできない、非日常的な異界の物語を、そこから還ってきた彼だけが知っている、という点にある。そして、その体験した世界が「この世」とは隔絶された異界であればあるほど、自身の戦争体験の意味を探り、またそれを人々に伝えるべき価値と必要性とが感じられるのである。しかし、部隊の中の一単位である下級将校や下士官・兵の体験は極めて限定された範囲にならざるをえない。[22] さらに、同部隊や同戦域からの生還将兵の場合は、大なり小なり類似した経験を持っているものである。そうした他の生還将兵と自身の体験の差異を最も際立たせるもの、そしてなによりも人々に語り伝えなければならないものこそが、彼が目にし、心に焼き付いて忘れられない戦友の最後の様子なのである。

あるビルマ戦生還者は、戦記を記す動機について、「ビルマ戦に関する本は他に沢山刊行されています。しかし私には、私だけしか経験しなかったことや私だけしか知らないことも多くあります。[23]」として、特に戦没した戦友のことを記録し、鎮魂するべく筆を取ったとしている。つまり、個人の戦争体験のなかでもとりわけ重要なことは、彼自身しか知らない戦友の最後を語りえるという点にあるのである。そして、それは彼が書き記さねば、永久に失われる事実であるとともに、同部隊の戦没者の遺族に肉親の最後を知る機会を与えるという意味で、社会に開くべき価値があると考えられるのである。つまり、戦友の死について記述するということは、そのたましいを慰めることであると同時に、自身の内なる戦争体験を、意義あるものとして社会に開くことでもあるのである。

表1　『一兵士の戦争体験』所収の戦没者一覧

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 笹山一等兵 | グワ | 虎に襲われ死亡 | 本山上等兵 | | 行方不明 |
| 谷田一等兵 | グワ | マラリア | 小林君 | | 自決（風の便り） |
| 西谷矯正上等兵 | ラングーン | マラリア・赤痢 | 山田君 | | 自決（風の便り） |
| 久保田上等兵 | タンガップ野戦病院 | マラリア | 大井君 | ポウカン平野 | 戦死（風の便り） |
| 橘英明少尉 | シンゴダイン | 会ってから消息不明 | 笠原上等兵 | | 落伍 |
| 松本上等兵 | シンゴダイン | 悪性マラリア | 岸本第三小隊長 | | 戦死 |
| 戸部班長 | | 敵陣攻撃中に戦死 | 小谷上等兵 | シッタン平野 | 糧秣収集中戦死 |
| 藤川上等兵 | | 敵陣攻撃中に戦死 | 冨田上等兵 | シッタン平野 | 糧秣収集中戦死 |
| 平田上等兵 | | 落伍 | 中村伍長 | シッタン平野 | 糧秣収集中戦死 |
| 萱谷上等兵 | | 落伍 | 縄田兵長 | シッタン平野 | 糧秣収集中行方不明 |
| 瀬澤中尉 | | ゲリラの銃撃による戦死 | 中村上等兵 | ペグー山系 | 迫撃砲弾により負傷後自決 |
| 太田貞次郎大佐 | サンダギー | 戦死 | 三木兵長 | ペグー山系 | 迫撃砲弾により戦死 |
| 花田上等兵 | サンダギー | 戦死 | 山岡上等兵 | ペグー山系 | 迫撃砲弾により戦死 |
| 橋本梶雄上等兵 | プローム街道付近 | 自決 | 小林軍曹 | ペグー山系 | 迫撃砲弾により戦傷死 |
| 田中上等兵 | ポウカン平野 | 落伍 | 神田上等兵 | ペグー山系 | 落伍 |
| 松下上等兵 | ポウカン平野 | 落伍 | 玉古班長 | シッタン平野 | 衰弱死 |
| 山本上等兵 | ポウカン平野 | 落伍 | 北浜上等兵 | シッタン平野 | 自決 |
| 浜田分隊長 | ペグー山系 | 自決 | 友田上等兵 | シャン高原 | 落伍 |
| 林伍長 | ペグー山系 | コレラ罹患、自決 | 金井塚少佐 | チェジャンジー地区 | 戦病死　元中隊長 |
| 大西主計中尉 | ペグー山系 | コレラ罹患、自決 | 井上上等兵 | チェジャンジー地区 | 戦病死 |
| 三方上等兵 | ペグー山系 | 泥濘の中、立ったまま力尽きて死亡 | | | |

小田氏の『一兵士の戦争体験』にも、氏が記憶している限りの戦没上官や戦友の氏名と、その戦没状況が記されている。それを一覧にしてみたものが表1である。ここに記された四十一名の戦没者は、小田氏が所属した第一中隊（金井塚隊）がほとんどであるが、他中隊、部隊の知友や上官が含まれている。勿論本編の中には、氏名の判らない多くの戦友の姿も多数描かれている。そして、こうした戦没者の描写には、小田氏との関係や元気であった時の様子、その死に対する感慨が付されている。例えば、シンゴダインで戦病死した松本上等兵の死については、

病の進行を見守り運に任せるだけである。寝ている彼に蝿がたかってくるが、もう追い払う力もなく、鼻の穴や唇辺りに群がるにまかせていた。やがて黙ったまま事絶えてしまった。気の毒な末路であった。彼は鳥取の出身でさわやかな感じの人であった。この有様を親や兄弟が見たらどんなに悲しまれるだろうか。[24]

と記されている。また、ペグー山系を目指して撤退中に落伍してしまった平田上等兵の最後の様子については、次のように描かれている。

その真っ赤な夕焼けの中を平田上等兵は力なく歩いていたが、遂に道端に崩れるように体を投げ出してしまった「コラ、しっかりせんかい」と分隊長が強く気合いを入れた。「許して下さい。放って、行って下さい」と答えた。見上げた目にはキラリと光るものがあった。涙した目、赤い夕日がその雫を真っ赤に照らしていた。私は彼が姫路駅を出るとき列車の中で、父が持って来てくれたぼた餅だと言って、私にも分けてくれた時のことが思い出され、そのお父さんが今の彼の姿を見られたら、どんなに悲しまれることだろうかと胸が痛んだ。[25]

以上のように、小田氏は戦友個々について、自身が知る限りの最後の状況を記すことを心掛けていたことがうかがわれる。勿論、氏の戦記は、戦友の死それ自体をテーマとしたものではなく、「死をえがくというより、現実がこうだったということを伝えたい。誇張もないし現実を小さくしない、自分が感じたまま」を記すことが大きな目標であっ

たという。[26] しかし、一方で氏は、「遺骨も戻らない多くの戦死者がいると知ってもらうことが慰霊になります[27]」、「遺骨も戻らない戦友の供養のため、生きざまをそのまま伝えたい」とたびたび述べているように、[28] 書くことが慰霊につながるという気持ちを強く持っている。例えば氏は『一兵士の戦争体験』を刊行後の平成十一年、十二年に県内の神社、寺院、図書館、学校、公民館や全国の護国神社、主要寺院などに対して六百冊の寄贈を行っている。[29] そのうち岡山県内については、輜重五十七聯隊戦友の協力のもとにキャラバンを組み、各市町村を回りながら、そこにある忠魂碑に参拝している。ちなみに寺院だけではなく神社にも著書を奉納しているのは、骨はビルマに残っていても、せめて魂は故郷のお墓や氏神様のところに戻っていてほしい、という気持ちからであるという。氏の本に差し挟まれていた挿絵（図2）に「配布の数は英霊の数」とあるように、小田氏にとって戦記とは、自分のなかの戦争を振り返るものであるとともに、戦友の魂を慰めるものでもあったのである。

小田氏は言う「今日まで生かしていただき、平和の中に暮らしている私たちには、亡き方々に対し、慰霊の誠をつくさねばならない責任があります。書物として書き残すのも、講演会において亡き戦友の実名をあげて語り伝えるのも供養であり、幸運にも生き残った者のせめてもの勤めだと思っています。[30]」と。氏にとって書くこととは戦没戦友へ

**図2　挿絵**

ぼろぼろの軍服をまとい、自決用の手榴弾を腰につけ、はだしで杖をつく姿は、敗走当時の著者の姿を表している。又、背負子に背負い、墓石として積まれている本は著書を象徴している。

の供養であり、また、それが生還者の戦友に対する責任でもあるのである。それでは、小田氏はなぜ、そうした責任を果たし続けようとするのだろうか？

## 四　戦記の書き手と戦没戦友の関係―死生をこえた共同性―

先に述べたように、戦地とは日常生活を超越した、非日常的な異界と捉える事が出来る。生還将兵とは、その異界から日常に戻り得て、現世に生き続ける存在であり、戦没者とは、異界である戦場で命を落とし、現世に戻れなかった存在である。「戦友」という言葉は多義的な意味を持つものであるが、野戦を経験した将兵の立場から言えば、そこには「生還した戦友」と「戦没した戦友」とが存在することになる。小田氏は戦没した戦友のことを記録することが彼等の供養になり、それが生き残った者の務めであると述べているが、それでは生き残った者は、戦没者に対してどのような務めを負っているのであろうか。

冒頭にも記したように、戦友という語の意味は単に戦場における友人という意味だけに留まるものではない。しかし、内地の兵営における戦友関係に比べ、野戦で生死を共にした同年兵や上官、部下との絆は、一般的に非常に強固なものになると言われている。河野仁氏によれば、兵営生活においては軍隊内務令に規定された中隊ごとの内務班組織と、そうした職制上に規定された上官と部下のフォーマルな関係のほかに、内務班における兵士同士の関係である「インフォーマルな組織構造」が存在したという。いわゆる、「星の数」（階級）と「めんこの数」（軍隊での年期）の違いである。そして、部隊が戦地に入ると「階級構造の縮減」現象がおきるとともに、「インフォーマルな組織構造」が戦闘組織の特徴として強くあらわれてくるという。[31] つまり、階級差は最後までついて回るにしろ、内地の兵営におけ

る硬直した秩序は次第に解体され、階級格差が縮減された、より柔軟で、実存的な人間関係が形成されるのである。[32] 敵との対戦と生命の危険の中で将兵達は、運命共同体としての部隊―とくに中隊―のなかで絆を深め、所属する部隊と、戦場で苦楽をともにする戦友たちに対する責任感のもとに戦うのである。伊藤桂一氏は、戦友関係について、「お互いの骨を拾いあう仲間」と表現しているが、[33] これは戦場という異界において、同部隊という共同体に属する者同士の信義に基づく関係と捉えられよう。戦友会や戦友たちにとって、戦没者を慰霊するということは、生還戦友からの戦没戦友に対して果たす信義として捉えられているのが普通である。それでは、戦記の書き手たちは、具体的に、いかなる意識に基づいて戦没戦友のことを記すのであろうか。

先に挙げた高橋氏は、生還者たちの戦没者に対する「生き残った負い目」が動機にあり、その負い目を軽くすることが、即ち書くことであると論じている。[34] しかし、注意しなければならないのは、この「負い目」というものを、巷間よく言われている「うしろめたさ」として把えてしまうことである。小田氏の場合、その著作やインタビューから感じた限りでは、執筆動機の背後に、生き残ったこと自体へのうしろめたさがあるとは思われない。氏は、自身の生還を、自らの力によるものとは考えていないという。例えば、マラリア発症のタイミングがずれたことで行軍中の発病と、その結果としての落伍（即ち死）をせずに済んだことも、敵陣攻撃中、ふとしたことで弾がそれて命拾いしたことも、さらには身体の衰弱から手榴弾自決の瀬戸際まで追いつめられたときにも、氏が生き残れたのは「二重三重の奇跡」の結果にほかならない。それはまた同時に、マラリア発病の際にバグノールを注射して救ってくれた上官、敗走中に米を分けてくれた戦友など、多くの仲間の力でもあった。それゆえに、「私自身もここまで生かしてもらっているというのが、亡くなった戦友が、神様が生かしてくれているんだから、戦友達がお前を生かしているんだ」という気持ちであるという。[35] また、小田氏の上官で輜重隊ビルマ会会長であった溝口登氏も、戦友会報に「ビルマ戦線に

て誰かに助けてもらい　今茲に自分が生き長らえている」と記しているように、[36]こうした観念は氏の同部隊の戦友間に共有されていると考えられる。加えていえば、ある部隊が他部隊の援護と犠牲のうえに撤退に成功した場合、生還者の生命は犠牲となった部隊の戦死者に負っているという表現は、戦記にしばしば見られるものでもある。それゆえ、生き残るということは、戦没した戦友にうしろめたさを感じることというよりも、戦没した戦友に生かされているという意味において、そのいのちを継承し、いわば負う、という感覚が持たれているように思われるのである。

こうした生還者と戦没戦友の関係に付いて伊藤氏は、「死者は生者のいのちを負って死んだのであり、生き残った者は死者の生き残るいのちをも負っている」[37]その代わりに生還者は「自分は死者に対する、ある責任を負う。」[38]と説明している。つまり、戦場における戦友同士の絆は、生死によって切れるのではなく、いのちの受け継ぎを介した、生死すら越えた共同性のもとにあるからこそ、生き残った者は戦没戦友に対する責務として、その慰霊を行なうと理解できよう。ゆえに、戦記の書き手は、自分が戦場という異界で目にした戦友の最期を、現世の人々に書き伝え、その霊魂を慰めようとするのである。それは戦友の死であるとともに、書き手自身の生の原点なのでもあるかもしれない。

しかし、戦記の書き手と戦没戦友の関係は、必ずしも生還者から戦没者の霊を慰めるという、一方向的なベクトルしか働いていないわけではない。むしろ、書き手は、書いて慰めるべき戦友たちから力をもらって、執筆するという観念を持っている。例えば小田氏の場合、「綴り方」しか知らず、高齢者でもあった彼が本を刊行できたのは、「亡き戦友があの世から声援をしてくれたからこそ、素人の私に不思議な力が湧いてきて完成出来たのだと思っています。」、「残念無念の思いを残して逝った戦友達が、「小田お前こそ、今まで生かして頂いているのだから我々戦死した者のことを書き伝えてくれよ」と悲痛な声が懸っているからだとも、思います。」[39]と、くりかえし述べているように、戦友の霊魂の援助によって書かせられているとの感覚も見られるのである。そして、こうした感覚と体験は、戦記の書き手

にしばしば見られるものである。

例えば伊藤桂一氏は、自身の戦記作品の代表作である『静かなノモンハン』について、取材をくりかえしても、いざ書こうとすると、なかなか書き出すことができないという状態が続いたという。しかし、あるとき、突然「いま、書いてください、今」と誰かが耳元で言ったような気がしたことから執筆に集中し、原稿を書き上げる事ができたが、その執筆中は「うしろになにか人が集中しているような感じがある。背後でじぃっと執筆を見守ってくれているような感じ。いい感じでね」であったと語っている。[40] この場合、伊藤氏の背中を押し、執筆を見守る存在とは、氏にとっては当然ノモンハンで戦死した将兵の霊ということになろう。

さらに、戦没戦友の助けのもとに戦記を記す人々は、しばしば彼らの声の代弁者となる。パラオ諸島のアンガウル島の玉砕戦から生還した舩坂弘氏は、その多くの著作のなかで、戦友が純粋な気持ちで祖国に殉じていったことを強調し、その死を犬死とする戦後の論調に強く抗議している。それは、戦友たちが「国を守るために死を賭して戦った心情と、その最後を故国の人に伝えるべく、彼らはその報告者として私を生かしてくれたのだと」という信念からである。[41] という。多くの場合、こうした代弁は戦記の中で、著者の言葉として表現されるが、なかには、著者が戦没戦友自身になりきり、一人称で記されることもある。本稿の冒頭に挙げた伊藤氏の詩の場合、作者は「連翹の帯」の向こうで死んだ兵隊そのものとなって彼のことばをつたえているのである。このように戦友が戦没者になり代わり、その言葉やいまわの気持ちを表現するというスタイルは、戦記や部隊史のなかでは決して特異な例ではないのである。[42]

いわば戦記を記すという行為を通じた慰霊とは、生者による戦没者への一方的な慰霊ではなく、戦没者の霊魂による援助という、両者の相互関係のうえに成り立っているといえよう。そして、こうした相互関係を背景に、戦記の書き手は、自らの意思で書きつつも、死者への責任を果たすため、自身が一度は入ってさまよった戦野という異界の物

語を綴り、あるいは死者の気持ちを代弁し、または死者そのものとなって書くのである。そこには半世紀以上も前に戦没した戦友との距離感はあまり感じられない。むしろ、書き手がそこから帰ってきた、戦場という異界と、そこでいのちを失った戦友の魂との、親近性すら感じさせられるのである。

例えば小田氏にとって、戦場の情景や戦友たちの戦没状況は決して遠い過去の記憶ではないという。「戦友がどこでどうなって死んでいったのかは、今でも覚えていますね。薄い濃いはあるけど。橋本君（戦没した氏の戦友）のこともそうだし、ペグーでやっと夕方になってはだしで雨にぬれてそこまではついてきたけど「ワシもう先に行く」という て十メートル位はなれた所に行って自爆したひともあった。先行く、というのは、あの世へ、なんですよ。その時の顔が忘れられない[43]」。との氏の言葉からは、生死の境の光景は、日常生活のなかでもすぐによみがえる、ある種の身近さをもつものでもあり、さらにその意味において、半世紀以上も前に終わった戦争が、彼らのなかでは決して終わってはいないことを示しているように思われる。同様の例は、他の戦争体験者にもしばしば見られるものである。例えば中国大陸や東部ニューギニアの戦野に身を置きつづけた尾川正二氏は、自身について、「未だに戦争を引きずっているといえる。安達軍司令官が、最後まで気にしておられた遺族のかたへの思いも、十分に果たしえていない。非力を愧じるばかりである。現地の人々への感謝も、十分に報いえていない。亡くなった戦友への哀惜も尽きない。事あるごとに蘇る。長い野戦生活だったが、形のうえでの終焉に過ぎないのかもしれぬと思う。解決できないことを背負う、それが、野戦を体験したものの宿命かもしれぬ[44]。」と述解している。

このような戦争体験者の感覚について伊藤氏は「私たち戦中派の世代は、うしろを振り向くと、すぐそこにいつも戦場がある。戦後の年月は、私たちにとっては別な暦の上を過ぎていて、私たちはつねに、振り向くとすぐうしろにつづいている戦中の年月、それに密接して、生きてきたのである…決して戦争が終わった、などと思ったことはない[45]。」

として、戦争は過ぎ去った過去のものではなく、今もまたすぐ側にあるという感覚を、戦中派は持つのであると説明している。こうした、終わりのない、すぐそばにある戦場という感覚が、戦記の書き手を、死者の記憶とその声の代弁へと駆り立てているのではないだろうか。戦場も戦没戦友も、六十数年前に終焉を迎えた所属部隊も、過去のものではなく、近しいものである故に、彼らは異界に残った魂と交流し、その思いを伝えようとするのであろう。つまり、戦場の記憶と、死生をこえた戦友との絆を今も持ち続けていると感じているからこそ、彼らはかって遍歴した異界についてものがたり、そこで死んだ戦友を悼み、その声をこの世に残そうと努めるのである。

## おわりに　―異界としての戦場、巫者としての兵隊―

以上、小田敦巳氏の事例を中心に、戦場体験をもつ生還兵の戦記執筆と、そこに看られる戦没戦友に対する慰霊観について述べてきた。生還者による戦記の執筆は、自身の体験した戦争への問い掛けであるとともに、戦場に斃れた戦友の慰霊を目的として行なはれる。生還者、あるいは戦没者が過ごした軍隊及び戦場という空間を、非日常的な異界として捉えられるとするならば、戦記を記すという行為は、この世に戻り得た生還者が、異界での遍歴を物語ることに他ならない。そうした戦記において戦没者の情報が克明に記されるのは、社会（読み手）との関わりという点から言うならば、異界における個人的な体験を、社会に対して価値ある情報として開くことと考えることができる。しかし、書き手にとってより重要なことは、戦没者のことを書き残し、その存在と思いをこの世に留めることが慰霊になるという思いである。野戦の生還者は、多くの戦友によって生かされ、そのいのちを受け継ぐかわりに、戦没戦友に対して慰霊の責務を負っている。戦友関係は死生を超えて続くものであり、戦記による慰霊は、戦没戦友に対する

信義を果たすことに他ならないのである。また、戦記の書き手は、書くことを通じて戦友を慰霊しようとするが、それは生者から死者に対する一方的な働きかけだけに留まらず、例えば亡き戦友の声と援助によって本を完成させたという小田氏や伊藤氏の例にみるように、双方向的な関係と捉えられているのである。いうなれば、戦記という自分史を書くことは、生きている自分の体験の確認であるとともに、自分にいのちを継いだ戦没戦友の生の確認なのでもある。そして、生還戦友とは、即ち異界との回路を持ち続け、それを現世に伝えるメディエーターなのである。

最後に、こうした小田氏たちのような戦争体験者を、宗教学の枠組みの中で、どのようにとらえることができるであろうか。「先達」という意味において、確かに戦記の書き手は遺族や非戦争体験者の意識を戦争の記憶と、戦没者への慰霊にいざなう役割を果たしているし、海外における慰霊巡拝の現場では、実際に生還戦友が遺族を戦地に案内し、そこでおこったことを物語る、文字通り先達の役割を務めている。が、なぜそうした役割を彼らが務めることができるのであろうか。

彼らは戦場という、この世に住む人々には測ることのできない異界から還り得たからこそ、その異界の出来事を語り得るのである。そして、その異界は戦後も常に身近に感じられるものであり、また、その異界から戻ることのできなかった戦友と、死生を超えた絆を結び続けていることは、彼らがこの世に還ってきた存在であるとともに、異世への回路を保つ存在であることを示している。それゆえにこそ生還戦友は、戦没戦友を慰霊するとともに、戦場でのできごとと、そこで死んでいった戦友を記録し、あるいはその思いを代弁し、時には戦友自身になりきって、声を発するのである。この世から異界に赴き、再びこの世に戻ったあとも異界との絆をもち続け、そこに存在する霊魂のことばを伝える彼らは、いわば、巫者的な存在として捉えることができるのである。

もちろん生還将兵が文字通り巫者であるということを言っているのではないし、彼らは巫者のように霊に憑依され

たり、人格転換を起こして神がかりになり託宣を語るわけでもない。しかし、戦場という異界を遍歴した末にこの世にもどり、異界でのできごとや、そこで死んでいった戦友たちの思いを語るというあり方は、脱魂型の巫者に通じるし、また、戦友の霊魂を慰撫しつつも、ときにはその力に突き動かされ、助けられたり、さらにはその魂になりきって語るというありかたは、憑霊型の巫者に通じるのである。巫者の特色は、超自然的な存在と直接接触、交流することができること、即ち、異界の存在である神や仏、精霊等との回路をもっていることである。[46] 戦場や戦没戦友との回路をもち続ける生還将兵のありかたは、大なり小なりこれに通じるし、それゆえにこそ、彼らは戦記や講演会、さらに遺骨収集や慰霊巡拝で先達的な役割を果たすことができるのではないだろうか。

もし彼らをシャーマニズムのモデルの中でとらえることができるとするならば、これまでシャーマニズム研究が積み上げてきた、聖なる存在や世界と巫者との関係はもとより、巫者とその依頼者の関係性に関する議論を、戦没者慰霊研究のなかに援用することで、死者の魂を介在させた、戦友や遺族、非戦争体験者間の関係性の動態を、より明確に捉えられる可能性があろう。とくに、戦記や講演会などでの体験談の公開、慰霊巡拝の現場における説明などを、巫者と同じように、異界を背景とした語りととらえるならば、それは戦場という異界を経験していない―そこにこそ決定的な違いがあるのだが―遺族や非戦争体験者に、どのように捉えられるか、という課題が浮かび上がってくるが、それについて述べるのは次の機会に譲りたい。

## 注

(1)　伊藤桂一『連翹の帯―伊藤桂一詩集―』潮流社、平成九年。

(2)　戦争で死んだ将兵や軍属、民間人を表現する語彙として、戦死者、戦没者、戦争死者などいくつか存在し、その概念

の検討もなされてきているが、本稿では、戦争による死者を「戦没者」と表記した。これは「戦死」という言葉では表現しきれないほどの多様な死…戦病死、餓死、行方不明、脱走、奔敵、処刑、自決、弊死、事故死など…の登場こそ、日華事変以降の日本の戦争の大きな特色の一つであり、また、それが死んだ人々への慰霊の営みを考える上で重要と考えるからである。

(3) 高橋三郎編著『共同研究戦友会』田端書店、昭和五十八年。

(4) 西村明「遺骨収集・戦地訪問と戦死者遺族―死者と生者の時―空間的隔たりに注目して」『昭和のくらし研究』No.六、昭和館、平成二十年三月。

(5) 「現代日本の戦死者慰霊―慰霊の現場から視えるもの―」『宗教研究』三五九号、一六一～一六七頁、日本宗教学会、平成二十一年（パネル報告）。このパネル発表では、藤田大誠氏（國學院大學）司会のもと、西村　明（鹿児島大学）、中山　郁（國學院大學）、栗津賢太（創価大学）、土居　浩（ものつくり大学）の各氏が戦地慰霊や遺骨収集の問題について発表し、村上興匡氏（大正大学）がコメントを行った。

(6) 前掲『共同研究戦友会』二八九、二九十頁。

(7) 新村出編『広辞苑　第五版』岩波書店、平成十七年。

(8) 宮家準編『修験道事典』二二九頁、東京堂出版、昭和六十一年。

(9) 修験者の入峯修行の意味については、宮家準『修験道儀礼の研究』（春秋社、昭和四十六年）を参照されたい。

(10) 小田敦巳『一兵士の戦争体験―ビルマ戦線　生死の境―』修学社、平成十年。

(11) ラバウルでの戦争体験を戦記として刊行した八木弥太郎氏（野戦照空第五大隊）は、戦前においては一般的に使われた用語に「兵士」という言葉はほとんど出てこず、「兵隊」（単数）、「兵隊たち」「兵隊さんたち」（複数）が一般的であり、将校の場合、「兵」、「兵ら」という用語がつかわれていたとしている（八木弥太郎『南溟記　ラバウルに果てし霊よやすらかなれ』六頁、東京経済、平成七年）。現在では学術論文の世界では「兵士」が多く用いられる傾向があるが、本稿ではできるだけこれを避けている。たしかに現代の文章感覚からすれば「兵隊」という用語は使いにくいが、しかし、本稿の研究対象となる戦友たちは、志願にしろ召集にしろ「兵隊」になった、あるいは「兵隊にとられた」のであり、「兵士」になったとはあまり表現していないからである。さらにいえば、戦前における「兵隊」という語は、単に戦う存在を表現するだけではなく、むしろその背後に兵役に対する国民の義務感や嫌悪感、責任感や諦念、兵営内への怖れと

濃密な人間関係、そして郷土や故郷との関係など、近代日本の国民が培ってきた文化性を帯びたものであったと考えているからである。

(12) 小田氏によれば、平成十六年から二十年まで新聞に三十五回、氏の戦記やそれをもとにした慰霊活動、講演等の記事が掲載されたという（小田敦巳『恩愛をいただいて　第二部編』七十五頁、平成二十年）。因みに氏の『一兵士の戦争体験』については、神社界の機関紙である神社新報にも掲載されたが、その書評は本稿の筆者が行った（中山郁「『一兵士の戦争体験―ビルマ戦線　生死の境―』」『神社新報』二五八七号、神社新報社、平成十三年二月五日）

(13) 戦記作家としても著名な伊藤桂一氏は「戦記作品の主たる読者は、当然戦争体験者であるはずなので、作品の不合理や不自然についてはきわめてきびしい批判力をもって接してくる」（『戦旅の手帳　兵隊のエッセイ一』七十八頁、昭和六十一年、光人社）としている。それは戦記小説の世界に限らず、部隊史や個人による戦記にしても同様であり、もしその記述が大仰であったり、または虚偽を含む場合には、強い抗議も辞さない例が見られる。例えば、ある島での玉砕戦の体験を記した作品は、あまりに筆者の戦闘状況が凄まじすぎるのでは、ということが同部隊の戦友会の人々から指摘されている。また、ある戦地からの生還者が人肉食体験を記した本を刊行したが、同島の生還戦友たちがその著者の行動状況の不自然性に気付いたことから記述の真偽を疑われ、結局本人から虚偽であったことが申し出された例もある。さらに、部隊の名誉（戦闘状況）に関わる問題も大きな関心が持たれている。例えば飯塚栄二『パプアの亡魂』（日本週報社、昭和三十七年）は比較的早い時期に公刊された東部ニューギニア戦の戦記として出回り、著者の属した第五十一師団の終戦前後の状況や将兵の心境を知るために参考になるものである。しかし、同地域で苦戦していた四十一師団に関する記述に誤解があるとして、同師団の元将校はその誤りを正し、部隊の状況を正しく知らせることも目的の一つとして戦記を執筆している（梶塚喜久雄『死ぬことと見つけたり　河三五六五部隊戦記』元歩兵第二三八連隊戦友会、昭和四十年）。小田氏の『一兵士の戦争体験』は、元聯隊長の畑欽二氏などの元将校や、所属中隊の指揮班長であった溝口登氏などの支持や推薦を受け、刊行後に本を岡山県内の寺社や公民館に寄贈するキャンペーンを行った際には、戦友たちの手伝いを得ている。元聯隊長代理であった植田穣氏は、小田氏の著作について、「(四) 小田様の戦記の内容は実に正確で、総てが事実に基づいていささかの誇張もなく記載され、又登場人物も総て実名をもって記載されております。これは珍しいことです。(五) 戦記物には時として上官・同僚に対する悪口批判があるものですが、これが全くなく、常に「報恩感謝」の気持ちで対処されておりますことは、小田様の良き人柄の、しからしむるところかと思います。」と記

しているが、こうした点によって、戦友たちの評価を勝ち得たのであろう（小田氏前掲『恩愛をいただいて　第二部編』一八八頁）。

(14) 平成二十一年一月十日、岡山県岡山市の小田氏宅にて伺う。

(15) 小田前掲『一兵士の戦争体験』四四七～四五一頁参照。

(16) 平成二十一年一月十日、岡山県岡山市の小田氏宅にて伺う。

(17) 野呂邦暢『失われた兵士たち―戦争文学試論―』六十七・六十八頁、芙蓉書房、昭和五十二年。その際、野呂氏も引用しているが、北ビルマのミートキーナで戦った丸山豊氏（第五十六師団（竜兵団）軍医）が、著書『月白の道』に記している執筆目的を参考に掲げておく。「中国雲南省および北ビルマにおける戦争体験は、生あるうちに一度は散文として書きのこしたいと考えていました。まずは無念な死者たちへの鎮魂のため、つぎは私自身の痛みをあらわにするため、そして戦場のありのままを訴えるため、あの荒寥と絶叫を、いつかは記録しなければと思いながら…」（丸山豊『月白の道』一五三頁、創言社、昭和四十五年）。

(18) 高橋前掲『共同研究戦友会』三〇六頁～三一五頁。

(19) 小田前掲『一兵士の戦争体験』十七頁。

(20) 野上元『戦争体験の社会学―「兵士」という文体』六十頁、平成十八年、弘文堂。

(21) 一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』吉川弘文館、平成十六年。

(22) 例えば津山九条の会主催で行われた講演会のアンケートに、小田氏の話について「「我かく戦えり」のうら返し。大変なご体験には同情するものの、ビルマ構想、戦略、戦術の誤りの結果であることは、兵隊には関係ないところであろうけど、伝わって来ないのは不満である。」という感想が見られるのはその辺りの状況を示すものである（小田前掲『恩愛をいただいて　第二部編』六十四頁）。また反面、自身の戦場体験を戦争の巨大な流れの中に位置付けようとする余り、個人の体験よりも戦史の記述に終始してしまう例も戦記には多数みられる。

(23) 大古場茂春『ビルマ戦線　菊の一兵卒』三五〇頁、平成四年。

(24) 小田前掲『一兵士の戦争体験』二一四、二一五頁。

(25) 小田前掲『一兵士の戦争体験』二二九頁。

(26) 平成二十一年一月十日、岡山県岡山市の小田氏宅にて伺う。

(27)「戦争の記憶忘れまい　ビルマ体験記朗読テープに」山陽新聞、平成十六年四月五日（小田敦巳『恩愛をいただいて　第二部編』七十九頁所収）。
(28)「戦争の愚かさ伝えたい　ビルマ出征記出版の小田さん（岡山）」山陽新聞、平成十七年四月十四日（小田敦巳『恩愛をいただいて　第二部編』八十五頁所収）。
(29)この活動についての寄贈趣意書や新聞等の記事については小田敦巳『恩愛をいただいて』二十八～四十四頁、平成十三年、を参照。
(30)小田敦巳『ビルマ最前線　白骨街道生死の境』（光人社、平成十六年）の前書きより。
(31)河野仁『〈玉砕〉の軍隊〈生還〉の軍隊―日米兵士が見た太平洋戦争』六十六頁・一二八頁、講談社、平成十三年。
(32)伊藤桂一『兵隊たちの陸軍史―兵営と戦場生活』番町書房、昭和四十四年。また、尾川正二氏も野戦に行くと、初年兵なるがゆえに殴られるということは一切なく、三か月、四か月と経つうちに、上官に対する言葉遣いも、親疎に応じて四角な軍隊語から自然な日常語に変わっていき、「階級の意識は消えない、だが、もっと近接した間柄になってきているのである。」と述べている（尾川正二『帝国陸軍の教育と機構』三十九、八十六頁、新風社、平成十五年）。
(33)伊藤桂一・野田明美『若き世代に語る日中戦争』一四二頁、文芸春秋、平成十九年。
(34)前掲『共同研究戦友会』三一一頁。
(35)平成二十一年一月十日、岡山県岡山市の小田氏宅にて伺う。
(36)溝口登「ビルマ派遣元輜重兵第五十四聯隊第一中隊　平成十一年度　会報」（小田前掲『恩愛をいただいて』四十四頁所収）。
(37)伊藤・野田前掲『若き世代に語る日中戦争』一七一頁。
(38)伊藤・野田前掲『若き世代に語る日中戦争』一七九、一八〇頁。
(39)小田前掲『一兵士の戦争体験』二八二頁。
(40)伊藤・野田前掲『若き世代に語る日中戦争』一五九、一六〇頁。
(41)舩坂弘『英霊の絶叫―玉砕島アンガウル』一九四、一九五頁、文芸春秋、昭和四十一年。舩坂氏は第十四師団（照兵団）歩兵第五十九聯隊第一大隊第一中隊軍曹。戦後パラオ諸島への遺骨収集や民間慰霊団の先鞭をつけた人物でもある。
(42)例えば輜重兵第三十二聯隊第一中隊の部隊史『我等の軍隊生活』には、ハルマヘラ島で戦病死した戦友の呟きという

体裁の文が掲載されている。「椰子の実やパパイヤを見て、戦地で別れた俺達を想い出してくれるかい？。九段の社へ行ったら俺も英霊で納っていることを忘れないでなあ！また戦友会やなんかで黙祷するときによ、俺の髭面。青いソリあとを思い出してくれよなあ！そしてよ、そら、「海―ゆかば―水づ―くかばね――山―ゆかば―……」あれをよ！心のなかで歌いながら、俺の笑い顔をよお。俺はお袋似なんだから。（今は亡き永橋輝夫君に代わって記す・合掌）」という感じのものである。この文の筆者は戦没者の班長で、遺体を野戦病院から引き取り担架で隊まで運び、また、部隊の慰霊祭への参加を勧めるために遺族のもとに行くなど、戦没者と縁が深い人物である。この文自体は戦没者の口を借りて、その埋葬から遺族探しの様子を説明するという体裁をとっているが、身近な戦友ゆえにこそ、東京下町育ちの戦没者の口調で、彼に成りきってその気持ちを書き表そうとしていると考えられるのである。（元輜重兵第三十二聯隊第一中隊戦友会八木会『我等の軍隊生活』三三一頁、昭和五十八年。）

(43) 平成二十一年一月十日、岡山県岡山市の小田氏宅にて伺う。

(44) 尾川正二『帝国陸軍の教育と機構』一九五・一九六頁、新風社、平成十五年。著者は第二十師団（朝兵団）歩兵七十九聯隊に所属し東部ニューギニア作戦に従軍。主な著書に『極限のなかの人間―極楽鳥の島』国際日本研究所・創文社、昭和四十四年（第一回大宅壮一ノンフィクション賞受賞）。『野哭　ニューギニア戦記』創元社、昭和四十七年などがある。

(45) 伊藤桂一『戦旅の手帳　兵隊のエッセイ一』三十五、三十六頁、光人社、昭和六十一年。

(46) シャーマニズムの概念と脱魂型、憑霊型の分類については、佐々木宏幹『シャーマニズム―エクスタシーと憑霊の文化―』（中央公論社、昭和五十五年）を参照。また、筆者は前掲の神社新報掲載の『一兵士の戦争体験』書評において、生還者の巫者的性格について若干ながら言及している。

※本稿作成に当たっては小田敦巳氏にはインタビューにお答え頂くなど大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。また、本論文は國學院大學研究開発推進センターの研究事業「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」の成果の一端である。